文京区立図書館報

第 88 号

昭和57年10月 1 日

区立図書館目白台地区に建設中！

～文京区立図書館建設の基本計画達成される～

区立図書館は、今日の社会が情報化社会、学習社会として変ぼうしつつある中で、すべての人にいつでも無料で公平な図書館サービスを提供することにより、区民の生活課題を解決していくための学習の場、すなわち知識や情報を提供する資料センターであると同時に地域の文化センターとして社会的課題に応えていく重要な役割を担っています。

また、学校教育の場との連携のもとに「心の教育」の実践の場として、子供達が本になじみ親しむことにより、読書の楽しさを身につけるための積極的なサービスを展開することも区立図書館の大切な役割の一つです。

文京区は、文化と教育の歴史のなかで「教育のまち」としてはぐくまれて来ました。とりわけ図書館建設につきましては、基本構想並びに基本計画に基づき、その設備を着実におしすすめてまいりました。

このたび、基本計画の最終目標である８番目の図書館（仮称）目白台地区図書館が関口三丁目17番９号に建設中で、昭和58年６月の開館を目指して、開館準備をすすめています。

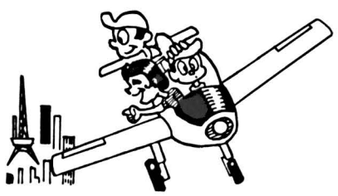
目白台地区図書館完成予想図

この図書館は、地下１階地上２階建で約 945m^2 を有し、貸出しを中心とした地区館で資料は図書42,000冊（うち児童書12,000冊）レコード、カセット5,000点をはじめ雑誌等を備える予定になっています。

（仮称）目白台地区図書館の開館によって、区立全図書館の蔵書数は約 428,000冊、レコードは約43,000枚となります。

今後は、貸出方式の統一など図書館サービスのシステム化を進め利用者サービスの向上を図るとともに、身障者に対する図書館サービスも充実してまいりたいと思います。

◀空から見た
（仮）目白台図書館周辺



目白台の街の人の声より

目白台３－21－１
石　川　喜　一

文京区で８番目の図書館である、目白台図書館がオープンできる運びになりました。長い間設置を渇望してきた地元住民の一人として、心よりお喜び申しあげます。

図書館は申すまでもなく、私たちのさまざまな学習要求を呼び起し、そして満たしてくれ、また生活の中で必要な情報を提供してくれる最も身近かな文化施設です。

文京区の図書館奉仕は23区随一、全国的に見ても高い水準にあり、いつも誇りに思っているところです。新設の目白台図書館が、目白台及びその周辺に住む区民の文化活動の拠点として十分その役割を果してくださることを、期待してやみません。

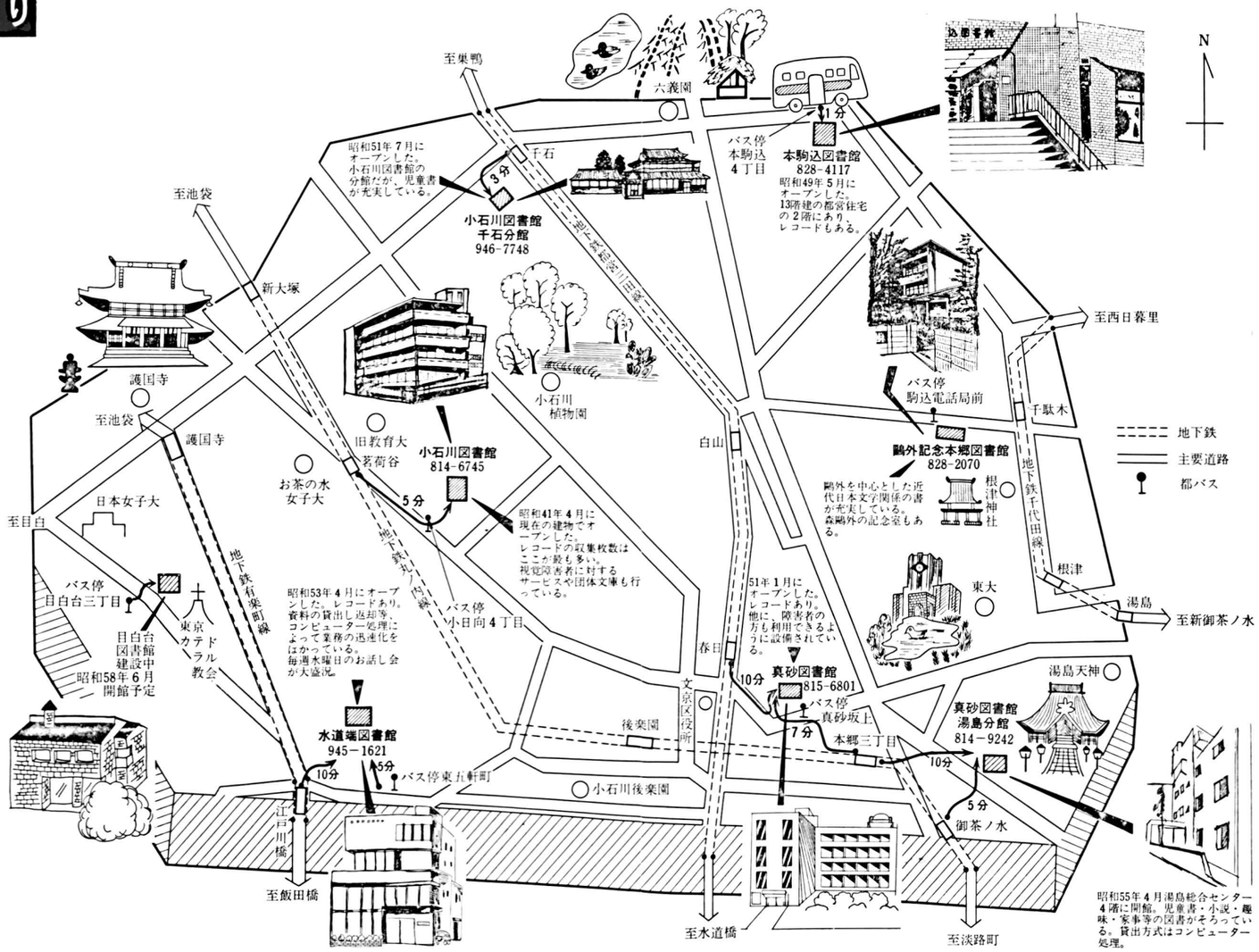
目白台３－６－４
小　西　明　子

ブルドーザや、トラックの出入の騒々しさも一段落して、少しずつ姿を現わし始めた待望の図書館。「目白台に図書館を.!」の長い間の願いが着々と現実になって来る様子に、親子共々喜びで胸をふくらませています。

現在は、水道端図書館まではるばる出掛ける子供達がとても心配ですが、この静かな住宅地目白台に出来れば、本当に安心して気楽に利用出来ます。

活字離れの進む今、身近な図書館の完成によって、特に子供達が読書の楽しさを身につけ、又地域の人々が、この建物を通して、より広いつながりが出来、親密さが増すことを期待します。

開館が一日も早いことを、首を長くして待っています。



目白台３－17－19　峰　村　三　枝　子

大勢の人々がこの目白台地区に図書館をと願って一生懸命頑張って来ました。

私達もその一環として土地探しを始めたのは丁度国際児童年に当たる４年前、区の５ヵ年計画に目白台図書館建設予定があることを知ってからです。幸い、現在の土地を区が購入することになりました。この間、私達は、多くの人々の賛同と協力を得るため真夏の暑い盛りを走りまわりました。

今、来年オープンを目指して建設が着々と進められています。

大勢の人々の願いが実った図書館、エプロンがけで本を探せる図書館、子供達の夢を大きくはぐくむ本のある図書館、そして本を通して地域の人々と話し合いのできる図書館にしたいと、胸をいっぱいにして待っている今日このごろです。

◆ 子どもたちへインタビュー ◆

夏休みも終りに近い暑い日の午後、目白台地域の子ども達に会いに関口台公園、目白台児童遊園に行ってみました。あまりの暑さのせいか、残っている宿題のせいか、戸外で遊ぶ子ども達は多くはありませんでしたが、それでも図書館や読書などについて元気な意見をきく事ができました。

―ここに図書館ができるってことしってる？―
「え～!!しらなかった.!どこに!!どこに!!」
「うん.!しってるよ!工事してるもん!」
―どこか図書館利用してる？―
「うん!時々水道端とか鶴巻(新宿区)にいくよ」
「学校で見学にいった時、券をつくってもらった!」
―どんな図書館になったらいいと思う？―
「楽しい図書館がいいなあ」「いつ頃できるの？」「え～!!らい年.!」「もっと早くできればいいのに…」「いっぱいおもしろい本があるといい!」「子ども室の人は若い人がいい!!めがねかけてないひと!!」…当方、決して若くはなくめがねの人なのでありました。
―若いってどれくらいの人のこと？―
「まあ15歳くらい!!」?!
―どんな本をそろえてほしい？―
「いろいろな国の人のくらしがわかるような本」「スポーツの本いっぱい!!」「切手の本」「王さまシリーズはぜんぶそろえてね」「すいりの本ね。江戸川乱歩とか……」

かなり脱線しながらも、子ども達の期待する気持がひしひしと伝わってきました。

〝来年の夏は新しい図書館で一緒に楽しい時をすごしましょう〟

佐藤英理子・清水昭子（６年）
深沢順也・赤尾由比子・井上玲子・臼田万美子（５年）
成田陽子・安　由貴子（４年）
安　義之（２年）　**中村　瞳**（１年）

敬称略・原文のまま掲載しました。

文京区ゆかりの文学者紹介 ④　直木三十五

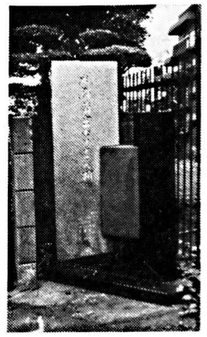
「すぐれた剣豪の悲壮な斬死にも似たる、直木三十五の死。嗚呼彼こそは、日本文学史に輝く巨匠」昭和9年2月、彼の死は新聞紙上に大きく報じられた。芥川賞と並び、すぐれた新進作家に贈られる直木賞に名を残す、直木三十五の、当時の人気が伺える。

彼は、明治24年2月1日に大阪市南区安堂町2丁目、古着商を営む父植村惣八、母しづの長男として生まれた。本名は宗一。家は貧しかったが、大切に育てられる。桃園小学校に入学。内気な性格だが、成績は抜群であった。市岡中、奈良県吉野郡白銀村小学校の代用教員を経て、20歳の時に早稲田大学予科に入学するが、5年在学ののち学費が続かなくなり退学する。早稲田に入学した頃より、仏子須磨子（ぶつしすまこ）と同棲生活を始め、その後2児をもうける。

著者の代筆、美術記者、大日本薬剤師会の書記など、職を転々とし、大正7年、27歳の時に春秋社創設に協力し「トルストイ全集」を企画する。「主潮」「人間」「苦楽」等の雑誌の運営に参加。執筆活動は、31歳の時直木三十一の筆名で「時事新報」に文芸時評を書き出したころより始まる。

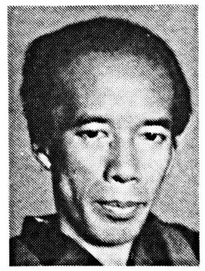
菊地寛らが創刊した「文藝春秋」にも、創刊号から参画し、『文壇ゴシップ』で話題を呼んだ。

三十一より、筆名を毎年三十二、三十三と満年齢とともに数を加え、三十五にとどまった。



（菊富士ホテル跡）

大正3年には、マキノ省三らと京都で「連合映画芸術協会」を設立。映画の製作を手がけるが、昭和2年、経営に失敗し上京する。駅留で送った荷物さえ、借金取りに駅で差し押えられてしまうほどの窮迫状態で当時、本郷区菊坂町82、現在の本郷5丁目にあった菊富士ホテルに転がり込んだ。



文京区と直木三十五の関係は、この菊富士ホテルで大正13年ごろから何度か出たり入ったりしていた。菊富士ホテルは、ホテルとはいうものの高級下宿の様なもので、大正3年の開業から昭和19年の終業まで宇野浩二や広津和郎をはじめ、竹久夢二、坂口安吾など文学関係を中心に数多くの人々が次々に宿泊している所であった。彼がここを選んだのも、早稲田大学の同級で雑誌「人間」の同人でもある田中純や、宇野浩二とも親しかったためだろう。

昭和3年「由比根元大殺記（ゆいごんげんだいさつき）」で大衆文壇に認められ、昭和5～6年にかけて「大阪毎日新聞」「東京日日新聞」に連載された「南国太平記」で流行作家になった。句点を短く切る、独自な文体で時代を活写した彼の作品は、幅広く読まれた。

流行作家になっても、いつもハイヤーを乗りまわし、東京～大阪間を週に一度は飛行機に乗るなど、派手な生活のため、金のたまらぬ事では無名時代と少しも変わらず、一年ぐらい宿泊料をためていても、平気であった。

彼は作家生活の大半を文京区ですごしている。

短かい作家生活のなかで、発表された作品の数は膨大で、約3万枚の原稿を書いたといわれている。

昭和9年2月9日、脊髄カリエス治療のため東大病院に入院。24日、結核性脳膜炎のため、ついに帰らぬ人となった。44歳であった。

文藝春秋社葬として、2月25日盛大な葬儀がおこなわれ、その翌年、昭和10年1月大衆文学の質的向上に資した功績をたたえ「直木賞」が制定され、現在にいたっている。

前回、宮沢賢治の記事中に『大正12年「やまなし」を自費出版』とあるものは、雑誌に掲載されたものであり自費出版はされておりません。訂正いたします。

編集兼発行
東京都文京区立小石川図書館
〒112 文京区小石川5丁目9番20号
☎ 814－6745